

平和宣言

本日、築地本願寺において、第41回千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要を修行いたします。

戦争は、あらゆるもののいのちを奪い、いのちの尊厳を踏みにじる行為であり、肯定されるものではありません。国籍、思想、信条などを超え、すべての戦没者を追悼するこの法要は、宗門の過去の過ちの反省に立つうえでも、浄土真宗本願寺派における非戦・平和への取り組みの中心的な法要であり続けています。

日本では人口の約8割が戦後生まれとなりました。戦争体験者の平均年齢も80歳を超え、高齢化しています。戦争の悲惨さを直接体験された方々は減少する一方、戦争を知らない世代の割合が急拡大しているのです。戦争を経験した祖父母や親から直接話を聞ける機会が少なくなり、風化や忘却への対応が喫緊の課題となっています。

宗門では2019年に「ドキュメンタリー沖縄戦～知られざる悲しみの記憶」を製作して各教区や全国の映画館で上映し学びを深め、また、戦時中の寺院を中心とした被災状況等の調査を実施し、平和への取り組みを進めています。

終戦76年をむかえる本年、世界に目を向ければ、この瞬間にも、まさにいのちの危険のなかに暮らしている人びとがいます。武力による争いだけではなく、戦争や争いの原因となる経済格差、貧困をはじめ、さまざまな社会的な課題が解消されてはいません。

特に、2020年のはじめから世界中で猛威をふるう新型コロナウイルス感染症は、人間の内面に潜む自己中心性をあらわにさせ、偏見・差別を生み、人びとや民族、国家の間に大きな分断を生じさせています。

地球規模での危機がもたらした、「新しい日常」のなかで、確固たる「非戦・平和への道」が模索されていくべきでありましょう。

専如ご門主は「念仏者の生き方」のなかで、

「今日、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積していますが、これらの原因の根本は、ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩悩にあります」

と述べられ、地球規模、国家単位の問題の根本的な原因もまた、私たちの無明煩悩、自己中心的な心で行動してしまう私たち人間の内面にあることを指摘されています。

私たちのよって立つところは、煩悩から逃れられない私たちの闇を照らし、一人残さずそのまま救うとはたらき続けてくださる阿弥陀如来のさとりの実にありまします。

そのありのままの真実に教え導かれ、仏さまのように完全にはできなくても、私たち一人ひとりが精進するのです。自分と他人とを分け、互いにかまえ、執われ、対立する心を限りなくおさえ、人と喜びや悲しみを分かち合うなど、日々精いっぱいつとめるのです。

対立や排除ではなく、心を通い合わせ、痛みを分け合い、協力し合って生きていく社会の実現に向け、共に努力する先にこそ、世界にある厳しい壁や困難をのりこえ、平和をより確かなものにする道がきり開かれていくはずです。

本日、全国各地の寺院から、平和の鐘が鳴り響きます。その響きに込められた私たちの願いが、世界へ、子や孫へ届いてゆくよう、共に精いっぱいつとめてまいりましょう。

2021(令和3)年9月18日

浄土真宗本願寺派

総長 石上 智康